

AJCC 2011年5月の研究会報告 (その1)
 「フランスの栄光 - 写真と映画の黎明期の偉人達」
 ニエプス、ダゲール、ナダール、ルミエール、ゴーモン、パテ、そしてエッフェル
 会員番号0644 山前 邦臣

5月の研究会は、東日本大震災のため実行できなかった3月のテーマ「ノンセクション+フランスカメラ」で実施、最初に山前会員による「フランスの栄光-写真と映画の黎明期の偉人達」と題する報告が行われました。報告(その1)に山前会員のお話を掲載します。

19世紀は、写真と映画の発明された記念すべき世紀である。それらはフランスで行われた。写真術はダゲールによって発明されたと思っている人がいるが、それは誤りだ。

1820年代にフランスのニエプス(写真1)が、金属板(ピューター)の上に「ユダヤ・アスファルト」とラベンダー油の混合物を塗ったものを乾板代わりにして撮影した風景写真が写真の始まりである。自宅の2階の窓から撮影したこの写真(写真2)は、現在米国テキサス大学(テキサス州オースチン)図書館に収蔵されている。ニエプスの「ヘリオグラフィ」に使用された暗箱(写真3)には、有名なシュバリエのレンズが使われ、この人を通じて情報がシャロン・シュール・ソーヌからパリのダゲール(写真4)にもたらされたのである。その後二人は共同研究契約(1829年)を結び、1839年のダゲールによる「ダゲレオタイプ」(写真5)の公式発表となった。



写真2 世界最初の写真 ニエプスが自宅の2階の窓から撮影した(米国テキサス大学蔵)



写真1 ニセフォール・ニエプス (1765~1833)

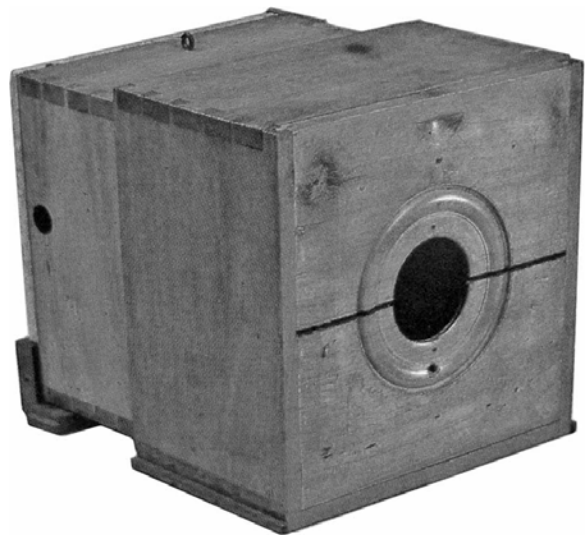


写真3 ニエプスを使用したカメラ 口径80mm、焦点距離300mmのレンズが付いていた



写真4 ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール (1787~1851)



写真5 ダゲレオタイプカメラ(1839年)



写真6 蛇腹付テールボード型組立暗箱 (1870~80年代、フランス、ギュイミノ社)



写真7 小型化したテールボード型カメラ(1889年、シャンプル・ツーリスト、オリジナルは「クラブ・アルパン」フランス・アルピニスト・クラブ仕様、J.フルリー・エルマジ社)



写真8 コンパクトに折畳めるツーリスト・カメラ(1892年、ジュール・シャンプル・ア・ジュ)

銀板写真といわれるのは銀メッキした銅版にヨウ素を作用させて感光性を持たせ撮影し、水銀蒸気で現像、生塩水またはチオ硫酸ナトリウム(ハイポ)で定着するからである。木製の暗箱写生器を改良したものがカメラとして使用された後、湿板、乾板の時代となって



写真9 ナダール(ガスパール・フェリックス・トゥールナシオン、1820~1910)

革製蛇腹の木製カメラが多種類発売された(写真6、7、8)。

これら湿板、乾板写真時代に活躍した写真師の代表が有名なナダールである(写真9)。本名はガスパール・フェリックス・トゥールナシオンで、漫画家となって漫画雑誌を出したり、新聞を発行したりもしたが、写真家となったのが1854年、その後パリのキャブシーヌ大通り35番地にナダール写真館(写真10)を開き、多くの有名な画家、芸術家、作家、俳優、科学者、政治家、企業家等の写真を残している。今日我々が彼等の肖像写真に接することができるのもナダールのおかげである。ナダールがこのアトリエを引き払った1874年にモネ達の第一回印象派展覧会がここで開催された。ナダール写真館の建物が現在も殆どそのままの姿で残っているのを、今回(平成22年11月)の学会出張中に発見した。この他ナダールは気球に凝って(写真11)多数のパリ等の空中写真を撮影しているほか、軍事的偵察のための気球隊を仏軍に作らせている。

キャブシーヌ大通りとスクリーブ通りの角で元ナダール写真館の向かいにあるホテル・ス

クリーブは、スクリーンに投影する映画を発明したルミエール兄弟(写真12)ゆかりの場所である。1895年12月28日このホテルの地下1階にあった「サロン・アンディアン(インド風サロン)」(写真13)で世界初の映画(シネマトグラフ)が上映された。現在、ホテルのレストランとなっているが、1階には別に「カフェ・ルミエール」が営業している。弟ルイ(化学専攻)と兄オーギュスト(生物学専攻)は早くから画家出身の写真家の父アントワーヌの仕事を手伝い、ルイのガラス乾板の研究が評判になり「ルミエール父子写真乾板・印画紙会社」(リヨン)を興し、1911年ジュグラのフィルム会社(ジョアンビル)を合併した。その後二人はシネマトグラフの特許をパテ社に売り渡したが、映画撮影機、映写機のほか1907年世界初の実用カラー写真の「オートクローム」を発売した。

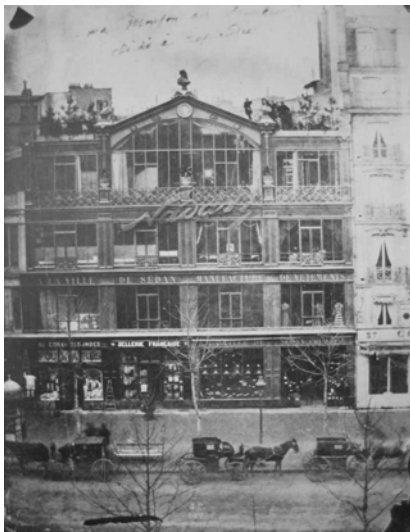


写真10 パリ、キャブシーヌ大通り35番地のナダール写真館、ここで第1回印象派展覧会が開催された。この建物はほぼ同じ姿で現存する。



写真11 ナダールは1855年初めて気球からの写真撮影に成功し、普仏戦争の時自ら気球隊長となって偵察、通信に活躍した。



写真12 ルミエール兄弟、右弟ルイ(1864~1948)、左兄オーギュスト(1862~1954)

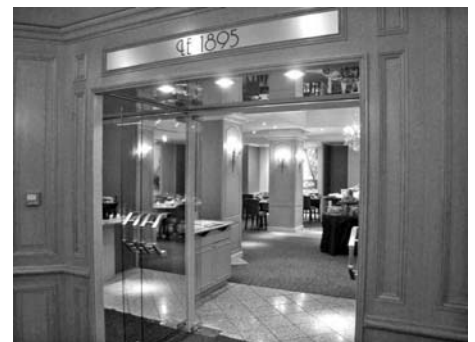


写真13 パリ、ホテル・スクリーブ地下1階の「ル・1895」、ここがルミエール兄弟により世界最初の映画上映会が開催された「サロン・アンディアン」であった。



写真14 エルジー(左、1944年)とエルジークラブ(右、1951年)、「L」はルミエール、リヨンで、「J」はジュグラ、ジョアンビルを意味する。



写真15 レオン・ゴーモンを助けたギュスタヴ・エッフェル(1832~1923)、ナダール撮影

1930年頃からナダ(ナダールの名前由来のスプリングカメラ)やエルジー(写真14)(L:ルミエールまたはリヨン、J:ジュグラまたはジョアンビル)など多数のステルカメラやフィルムを発売し、兄弟の没後の1961年スイス・チバ社が買収した。

1864年パリに生まれたレオン・ゴーモンもステルカメラと映画製作に一生を捧げた人である。少年時代から写真術に取り付かれ技術学校を出た後、当時多数の木製組み立てカメラを製作していたコントワジェネラル・ド・フォトグラフィエー社に就職、才能を認められ経営者から会社を譲るといわれた。しかし、資金がなくなっているところへギュスタヴ・エッフェル(写真15)からの出資の助けを得て、ゴーモン社(写真16)を設立し、1898年頃から各種スピード・ゴーモン、ステレオ・スピード、ブロックノート(写真17)、レポーター等を発売した。同じく映画製作、シネカメラ製作で有名なパテ社の創立者シャルル・パテとはさまざまな合併、共同制作活動を行っている。ゴーモン社の社章は雛菊で、母親の名前がマルグリット(マーガレット:ヒナギク)からきている。

一方、パテの鶏マークは古代ローマ人が野蛮なガリア人をラテン語でガリユス(言うことを聞かない雄鶏)と呼んだことに由来する。これを今でも誇りにしているフランス人は、どのスポーツのナショナルチームもこのシンボル(ル・コック)を付けている。

ゴーモンもパテも会社は今でも存続し、共に映画を製作し、ゴーモン社は現在なお大映画館チェーン(写真18)を経営し健在である。



写真16 レオン・ゴーモン社名になったチェンジング・マガジンのプレート



写真18 パリ、シャンゼリゼ大通りのゴーモン映画館、ゴーモン社は今も生きている。

(研究会報告—その1)終



写真17 ヒュッティヒ・アトム(1909年)より早いアトム判(4.5x6cm)のブロックノート、ガマガチ型の乾板ケース付